

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI



2019 ARTA DIGITAL Rd.7 SUGO
HIS SPEED WAS BEYOND THE IMAGINATION

「想像を超えた速さで、悲願へ」



ARTA が戦うスーパー GT の 2019 年シーズンは残り 2 戦を迎え、最終決戦へ向け最後のふるいにかけられる。
そんな戦いの前に、またしても雨。魔物の棲むと言われるスポーツランド SUGO であるだけに、荒れた 1 戦になることは間違いなさそうだった。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

スターティンググリッドに並んだ各車がスリックかウェットかとタイヤ選択に迷う中、GT500 クラスを戦う 8 号車 ARTA NSX-GT も GT300 クラスを戦う 55 号車 ARTA NSX GT3 もウェットタイヤに履き替えてスタートに臨むことを決めた。星「そこそこ降ってきてるからウェットの方が良いかなという気がする。ドライでいってもそのまま遅れていくだけっていう気がするから。ウェットで行くなら富士で使ったのにするかもうひとつ硬いのにするか。できれば 27 ラップ行きたいなと思ってるんだけど」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

伊沢「硬くて外すくらいなら柔らかい方に外す方が良いと思う。富士と同じヤツ」

星「じゃあウェットタイヤで行きますか？」

伊沢「みんな換えている感じ？」

星「前の方は換えてるけど、後ろの38や23はまだスリックのまま。

100はウェットで17はコンパウンドを迷っているところみたい」

伊沢「3号車は？」

星「3はウェット、17はドライだね。今23もウェットに換えました。ドライは3台だけ。SCスタート決定です」

伊沢「今の路面で言うとドライタイヤは100%ないね」

ウェイトハンディが半減されてもなお31kgを搭載する8号車の伊沢拓也は9番グリッドからのスタート。

エンジニアの星学文とのやりとりでウェットタイヤに決めた。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

一方、クラス最多の 42kg を積む 55 号車は、それでも強力なペースでフロントロウを確保して高木真一がスタートドライバーを務めた。ドライタイヤで苦戦する GT500 クラスよりも速い高木は、ライバルの動きを見ながらペースをコントロールする余裕さえあった。そのくらい 55 号車の仕上がりは良かったのだ。エンジニアの一瀬俊浩と相談しながらペースを決めていく。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

高木「500 って全車ウェット？ ペースが遅いよ !?」

一瀬「何台かはドライ。2 位は 56 号車、11 秒後方」

高木「やっぱり磨耗的には左フロントだね。残り周回数だけ教えておいて」

一瀬「了解。ミニマムまではあと 16 周。今 28 秒台で走っているのは 1 台だけだから、29 秒台までは落としても大丈夫だよ、タイヤを守って。56 号車から後ろは 31 秒台。メインストレートの雨量が増えてきた」

高木「他のラップタイムを教えて。合わせて走るよ」



一瀬「速いのは LEON で 30 秒 3。後ろの 4 号車は 30 秒 9。今後ろとの差は 12 秒ある。今の状況ならそのペースで OK」

高木「タイム上げる必要があるなら上げられるからね、残り周回数で言って」

一瀬「了解。ペースが良いから基本的には引っ張る方向で行きます」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



一瀬が後続とのギャップをチェックしながら、高木にペースコントロールの指示を出す。それと同時に乾いていく路面コンディションと雨雲の様子とも睨めっこしながら、次のスティントに向けた戦略を考えなければならない。

一瀬「高木さん、4号車とのギャップが9秒になってきたからちょっとプッシュしようか。この周でミニマムでいつでもピットインできるからタイヤのことは気にせずに」

高木「了解。結構プッシュしてるよ？」



AUTOMACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

一瀬「良いペースです。これキープで行けるところまで行きましょう。タイヤの状況はどうですか？ 無交換でも行けるとか？」

高木「ライン上は大分乾いてきてるから、無交換は無理だな。1つ硬くても良いと思う。この後の雨量によるね。まだ降りそうだったら今のタイヤ。ムービングはむっちゃしてる、すごいよ」

一瀬「了解。SC リスクもあるからもしかしたら40周くらいで入れるかもしれない。ストレートはまた雨が増えてきた」

高木「そうだね、全体的に増えてきてるね。SCだけ気をつけよう」

セーフティカーが入るとなれば、ピットレーンが閉じられる前にピットに飛び込まなければ大きなロスを喫することになる。マシンが完璧な速さを持っているうえにチームとドライバーが完璧にコントロールできている55号車にとって、心配しなければならないのはクラッシュや急な雨脚によるセーフティカーという外的要因だけだった。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



S. Takagi N. Fukuzumi

AUTOBACS
ニッポンを走る

HONDA

ARTA

AUTOBACS
55
zf.com/jp

CVSTOS BRIDGESTONE



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

一方、ウェットタイヤでスタートした伊沢の8号車は、一旦は6位までポジションを上げたもののトラクション不足に苦しんでペースが鈍り、10位まで後退してしまった。

伊沢「速いコーナーは良いんだけど、小さいコーナーで全然リアがない」

星「内圧はどう？」



伊沢「リアはちょっと下げたいかな、トラクションがないから。硬い方で行く？」

星「硬い方にしようかなと思います」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



再び雨量がじわじわと増え始める中で、早めのピットインを決意し野尻智紀にドライバーチェンジを行なう。

星「ここからちょっと長いけど頑張って行こう。まだトップと同一周回だからね。ターゲットは10秒先の12号車です」

野尻はタイヤのウォームアップに苦しんでなかなかペースが上がらない。

星「ちょっと雨量が増えてきているけど、(タイヤが)温まらない感じ？」

野尻「はい」

星「グリップしない？」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



野尻「そうだね～、300 を抜きに行くのも大変なくらい。1 人で走ってればもう少し温まると思うけどそれがツライ」
周回遅れにされ、行けても最高で 9 位という厳しいレースになってしまった。

そこでエンジニアの星はソフトなタイヤに履き替えてアタックする戦略を提案する。もはや失うものはなかったからだ。

星「残り 28 周あるから、一番柔らかいのに換えて追い付くようにしようか。このままじゃ厳しそうだから」

野尻「はい」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

T. NOJIRI

レース終盤はトップと同等かそれ以上のペースで周回を重ねた野尻だったが、時すでに遅し。

8号車は結局 12 位でレースを終えることになった。

星「お疲れ様でした、ポジション 12。最後は雨量が少なくなってきたのが合っていたということ？」



野尻「そういう感じはあるかな。柔らかいけどグリップは何も変わらない感じだったから。

すいません、もてぎ頑張ります……」

星「頑張りましょう、もてぎで」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



 **AUTOBACS**

 **AUTOBACS**

 **AUTOBACS**

 **AUTOBACS**



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

そして高木のドライブする 55 号車はトップを快走し続けていたが、36 周目に恐れていた事態が起きた。
GT500 クラスの車両がコースオフして止まり、セーフティカーが出動するかもしれない。
それを見て一瀬が瞬時に無線で高木を呼び入れた。高木が走っていたのは最終コーナー。まさに間一髪のピットインだった。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS



一瀬「入る、入るよ！SCが入るかも知れないからピットインしよう！」

高木「了解、今最終コーナーだよ」

ここでステアリングを託された福住仁嶺は、まだスーパーGTでの勝利経験がない。

そんな福住に土屋圭市エグゼクティブアドバイザーが気を引き締めるようアドバイスを送る。

土屋「タイヤ冷えてるから気をつけて」

福住「SC入ってるんだよね？」

一瀬「そう、入っている。雨量が増えるかもしれないからタイヤは高木さんと同じのを着けたよ。LEONも同じタイミングで入ってる」

福住「ああ～、向こうも速いだろうなあ」

一瀬「そうだね、さっきのペースを見ると速そうだね」

土屋「ドライバー勝負だぞ！」

福住「LEONは何台後ろ？」

一瀬「3台後ろ。ちょっと雨量が増えてきてるからね。でもこれで行くしかないからプッシュして温めて」

福住「タイヤ全然温まらないよ、これヤバイよ。全然グリップしないよ、本当にさっきと同じタイヤなの？」

一瀬「頑張れ、頑張れ。タイムはみんな一緒だから大丈夫」

土屋「仁嶺、集中していけ！水の少ないところを狙え！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



福住はここから好ペースで周回を続けて行く。しかしこれがまたひとつ悩みの種になった。燃費が苦しくなってきたのだ。GT500 クラスのペースがウェットコンディションで遅く、想定していたほど周回遅れにならなかったことで GT300 クラスとしては走行しなければならない周回数が増えてしまったからだ。

一瀬「後ろとのギャップは6秒あるから、ちょっとコントロールしていこう。燃費もちょっと管理して欲しい、少しリフト&コーストして」

福住「了解」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

一瀬「500 と同じペースで走ってるから周回数が予定より多くなりそうだから」
コーナーの手前で早めにスロットルペダルをオフにし、なるべくペースを落とさないようにしながら
燃費を抑えていく走りに徹する。
燃料消費量と残り周回数を突き合わせながら、ギリギリまで燃費をコントロールしていく。
一瀬「OK、ペースは良いよ。後ろとのギャップは 7.3 秒」
福住「燃費はどんな感じ？」



一瀬「まだ結構ギリギリかな」

福住「リフト&コースト結構やってるけど、タイム的にはどうなの？ 大丈夫なの？」

一瀬「タイム的には大丈夫」

福住「燃料はまだ足りないんでしょ？」

一瀬「今後ろに 3 号車がいる、それに抜かれれば大丈夫だと思う」

福住「フルプッシュして良い時は言って」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

タイヤとコンディションが合わずペースの遅い GT500 クラスのマシンに引っかかるが、燃費のことを考えると抜くために無理にプッシュするわけにも行かない。難しい状況に置かれて焦れる福住だったが、最後は溜まらずスロットルを踏み付けた。一瀬「残り12周、後ろの4号車とのギャップを見ながら走ろう。今5秒ある。1秒前でゴールすれば良いから、なるべく管理しよう」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



土屋「なるべくアクセルオフを長めに！」

福住「やってるよお〜。前の500が邪魔なんだけど、どうするのこれ？」

一瀬「遅かったら抜くしかないね」

福住「燃費は安全圏に入ってるんでしょ？ 俺もう行くよ!？」

一瀬「OK、OK。良いよ、使え、使え！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



しかし燃費が厳しいのは後続も同じ。結局最後まで福住に追いついてくるライバルはおらず、最終的に 15 秒も引き離して独走のトップチェッカーを受けた。ARTA のピットガレージは歓喜に包まれ、ホッと一息の福住からもようやく嬉しそうな冗談も聞こえてきた。

一瀬「優勝だ、優勝！」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



福住「良かったあ〜、最終戦の前に勝てて良かった。
今回はクルマが最高だったね」

土屋「お前もよく燃費セーブしたよ。本当に良い
仕事したよ、100点！」

福住「ありがとうございます」

土屋「疲れたろう？」

福住「ちょっと腰が痛いですね（笑）」

土屋「俺と鈴木亜久里が揉んでやるよ（笑）」

福住「やっぱり昨日牛タンを食べなかったのが良
かったのかなあ。あそこでタイヤの選択も良かっ
たと思う。最初はキツかったけど良い選択だった」

一瀬「あのタイミングで LEON は全然タイムが出
てなかったからね、仁嶺の頑張りだよ」

土屋「お前が 500 より速く走るから燃費がキツく
なるんだよ！（笑）」



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



燃費が厳しくなるほどの予想以上の速さで今シーズン初優勝。これで2位に14.5点もの差をつけランキングトップで最終戦に挑むこととなる。そしてもてぎではウェイトハンディが降ろされ、足枷のない状態で純粋な勝負をすることができる。悲願のタイトル獲得へ向け、高木と福住、そしてARTAはとてつもなく大きな一歩を進めた。あとは一歩、本当に最後の一歩を前に進めるだけだ。



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA

RH+P S. TAKAGI



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA





AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



AUTOBACS
RACING
TEAM
AGURI

ARTA



株式会社オートバックスセブン

ARTA

THE "BIG RACE" FOR SUZUKI AGURI STARTED IN 1998
AS HIS VISION FOR THE FUTURE. OVER THE YEARS, IT HAS EVOLVED
THROUGH THE TOUGHNESS AND WILL OF ARTA. IN THAT SPIRIT,
ARTA IS RACING TO INSPIRE THE FUTURE OF MOTORSPORTS.



ARTA Project



ARTA DIGITAL You tube チャンネル

To Be continued next race...

ZERO
BORDER
Team ZEROBORDER

©2019 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA

Text : Mineoki Yoneya

Design : Hiroaki KATAYAMA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO., LTD